

- ◆**学校名** 熊取町立南小学校、泉南市立西信達小学校、貝塚市立木島小学校、
和泉市立光明台南小学校、和泉市立北池田小学校、和泉市立鶴山台南小学校
- ◆**主題名** 相手のことを思いやり、進んで親切にする **道徳の内容** B-親切、思いやり
- ◆**ねらい** 逆上がりができない明弘に対する一郎と将太の心情を考えるを通して、相手のことを思いやり、
進んで親切にしようとする道徳的心情を育てる。

◎**中心的な発問**

うれしそうに笑って将太を見ている明弘の様子を見ていた一郎はどんなことを考えているでしょうか。

◆**本時の展開**

	学習活動	発問と予想される子どもの反応	指導上の留意点及び評価
導入	◎鉄棒の技を友だちに教えてもらった場面を想起する。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 鉄棒の技を「友だちに教えてもらったことがある」という人はいますか。だれに、どんな技を教えてもらいましたか。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・一緒に練習した。 ・教えてもらった。 ・〇〇さんにさかあがりを教えてもらった。 ・やさしく教えてくれてうれしかった。 	○児童の経験を想起させる。 教えてもらったときの気持ちをたずねても良い。

展 開	<p>◎資料を読む</p> <p>◎一郎の自慢したくなる気持ちを考える。</p> <p>◎何度やってもうまくできない明弘を見た一郎の気持ちを考える。</p> <p>◎将太と明弘のやりとりを見た一郎の思いを考える。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>一郎が、かっこういさかあがりをみんなに見せたくて仕方がないのはなぜだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなに自慢したいから。 ・みんなに「すごい」と言われたいから。 ・他の友だちにできないことが自分にはできるから。 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>何度やってもうまくできない明弘を見て、一郎はどんなことを思ったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なんだかおかしくなってきた。 ・毎日練習してやっどできるようになったんや。そんな簡単にできるはずないやろ。 ・ほらみい、できっこないんや。 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>うれしそうに笑って将太を見ている明弘の様子を見ていた一郎は、どんなことを考えているでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「できるはずないやろ。」なんて思って、悪かったな。 ・将太のように明弘に教えてあげればよかった。 ・将太のように、次は自分が教えよう。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・教員が範読する。 ・「人ができないことができる」ときに自慢したくなる気持ちに共感させる。
終 末	<p>◎本時の学習を振り返り、道徳的価値を深める。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>今日の学習で考えたことや、これからこうしようと思ったことを書きましょう。</p> </div>	<p>○ふり返りを交流し合い、自分と多様な意見があることに気づき、自分の考えをさらに深められるようにする。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>〈評価〉</p> <p>自慢したい気持ちを思いやりについて自分なりに考え、これからどうしていったらよいかを考えている。 (ワークシート・交流)</p> <p>〈支援〉</p> <p>友だちの意見を聞いて自分の考えとの相違点に気づき、自分の考えをもう一度ふり返るようにさせる。</p> </div>

◆研究のまとめ

○授業実践について、チームとしてのまとめ

成果

- ・ねらいとした感想を書いている児童が何人かいた。⇒ 核となる中心発問が適切だったのではないかと考えられる。また、グループで、足並みをそろえることができた。
- ・登場人物が3人いてわかりにくかったが、絵(イラストや吹き出し)を準備することで、一郎に焦点が当たった。(読み物を理解させるための工夫)

課題

- ・ふりかえりを書かせるのに、授業をどうもっていくか。
- ・授業のテーマを、子どもに提示する方が良いのか？出すとすれば、最初か最後か。(主人公に焦点を当てて考えさせるのであれば、最初に提示するのは効果的かもしれないが、最初に出していいのか。

○道徳の評価についての提言

- 「評価を行う」という視点を教師自身が明確に持つ、ということが重要であると考え。
 - ・この視点を指導者が持つことにより、今まで以上に「ねらい」にせまる発問を考え、中心発問を精査し、同時に予想される児童の反応をより深く・細やかに想像することができると考える。
 - ・そのことにより、結果としてよりよい資料研究と授業準備を行うことにつながると考える。
- 別項目の価値についても評価を行うこともありうると思う。
 - ・教師がねらいとして設定した内容項目とは異なっても、児童自身が資料を通して道徳的価値の高まりが見られた場合は、評価に値すると思う。
 - ・指導者が必ず記録し、評価につなげる。
- 子どもの成長の様子を把握する方策につながる「書く」「発表・発言」に支援を要する児童に対しての評価方法を工夫するべきであると思う。
 - ・その子に応じた自分自身の意思表示の手立てを必ず授業の中に組み込むことで、どの子にも必ず評価をすることを意識することが大切だと思う。
 - ・例として、「〇〇さんの考えに近い人？」と問われたことに対して挙手することを児童自身の意思表示と見取ることや、ペア学習での発言を指導者が記録することなどが考えられる。

【各校での実践の記録】

◆実施学年（3年）

◆評価を位置づけた授業実践の分析

○評価の実際（評価した子どもの姿や、それをもとに行った支援）

①中心発問の場面の発言の様子や内容から

- ・「将太はいいやつだ。」と発言する子が多かった。一郎の心の動きを考えさせる支援が必要だと感じた。
- ・将太の言動前後における一郎の心の変化に迫る発問（問いかけ、揺さぶり）が必要だと感じた。
- ・「なんで明弘はうれしそうに笑っているのか？」という発問に対して、「手伝ってくれたから」「明弘自身もがんばれたから」「初めてさかあがりができたから」「将太のやさしさを知ったから」といった発言があった。・・・将太のやさしさやおもいやり、親切に価値を見出していると評価できる。
- ・「なんで将太は明弘にやさしくできるのか？」という発問に対しては「明弘にできるようになってほしいから」「みんなでできたら楽しいから」「このままだと明弘ができないままでかわいそうだから」「友だちだから」という発言があった。

→やさしくしたいという気持ちは、相手を助けるため・みんなで楽しむためから生まれてくることに気づいていると評価できる。

- ・「一郎はどんなことを考えている？」という一郎自身についての発問に対して、「悪かったな」「はずかしい」「何やってんだろう」「かっこわるいな」などの発言があった。

→一郎が将太と明弘の様子を見て感じている一郎自身の反省に気づいているが、相手のことを思いやり、進んで親切にするまでには至っていない。

②ふり回り場面の記述から

- ・下記のワークシート抜粋のように、将太が明弘を思いやり、進んで親切にすることの大切さを知り、深めることができた子どもは多かった。
- ・しかし、一郎の変容に価値を見出した子どもは数名にとどまっていた。
- ・また、「一郎はなんでかっこわるいと思ったのかな。」「それは・・・」と書き始めた子どもがいたが、どう表現したらよいのかが分からず、消してしまっていた。

○成果と課題

- ・教師としての成果は、一人で指導案を考え実践するよりも、学年・ブロックなどで協力することで、丁寧に授業に取り組む意識がより高められた。
- ・課題としては、振り返りで何を考えればよいのかが難しかったり、自分の思いを文章に表すこと自体が難しかったりする子どもに対する、より具体的な支援の手立てが必要と感じる。

◆評価に用いた資料サンプル（子どものワークシートなど）

「助け合うことの大切さ」に関する記述

- ・将太は助け合いができた。すごい。一郎は悪いけど、これから人を思いやることができればいいな。
- ・一郎は、これからは明弘に教えてあげるのかな。
自分もやさしい人になりたい。本当は一郎もやさしい人だと思った。明弘もこれから仲間に入れたら楽しいとおもう。
- ・人を助けるのはいいことだと分かった。人を助けたら自分も気持ちよくなっていつか助ける時がきたら助きたい。助けると思いやりがもてる。一郎は、とちゅうで悪く言ったことがだめだと思った時、せいちょうしたと思う。(4名)

「思いやり」に関する記述

- ・人を思いやるということは将太が明弘にしていたこと。
- ・助け合いというのは、【相手が】こまった時手伝ってもらう【あげる】ことだと思った。…【 】は教師による補充
- ・できない人がいたら、ばかにしてはいけない。助けてあげたら、手伝っている人も「ありがとう」などを言われてうれしいし、手伝ってもらっている人も手伝ってもらってうれしい。
- ・次は一郎がだれかに教えてあげる番だと思う。みんなで助け合うことが大事だと思った。
- ・人を思いやることが分かった。
- ・人と人で助け合ったら何でもできる。将太は明弘にできるようになってほしいから手伝ってあげる。
- ・人と人で助け合うと心がやさしくなる。たくさんやさしい心をもって友だちとも、なかよくしたい。(7名)

明弘に関する記述

- ・明弘がかわいそう。
- ・明弘ががんばっていた。(2名)

将太に関する記述

- ・将太はやさしい。(11名)

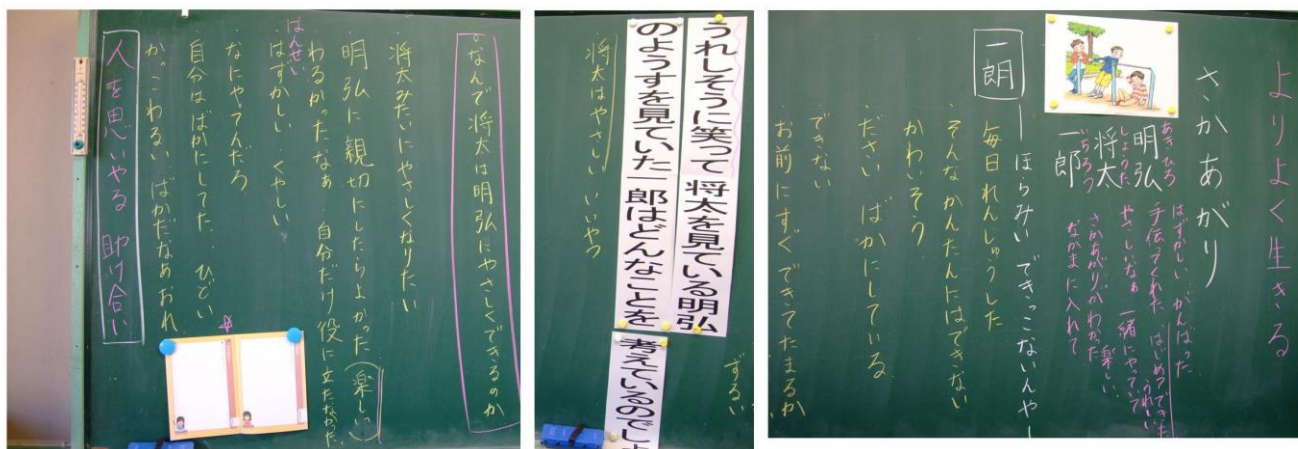
一郎に関する記述

- ・一郎はずるい。将太みたいにできなくてはずかしいのだろう。「自分は何をやってるんだ。」と思っている。(4名)

その他

- ・その他(8名)

参考資料



◆実施学年（3年）

◆評価を位置づけた授業実践の分析

○評価の実際（評価した子どもの姿や、それをもとに行った支援）

◎中心発問の場面の発言の様子や内容から

もともと一郎のことを、明弘にいやな気持ちを抱いているように捉えていない児童が多かったため、後悔や反省の声が多かった。前の発問や補助発問で、明弘に対する一郎と将太の態度の違いをもっとはっきりさせておけば、出やすかったと思う。

明弘への応援や自分も教えてあげたいという気持ちは、たくさんの児童からあふれていた。

友だちの発言を聴き、将太の思いやりや一郎の気づきについてふれることができた児童が多くいたので、評価に値すると思う。

◎振り返りの場面の記述から

「鉄棒など、できないことを教えてあげたり手伝ってあげたりしたい…」と、本文から離れきれない児童が多かった。もう少し思いやりや親切という内容項目に広げ、深めないといけなかった。

その中で、相手の気持ちを考えて、進んで親切にしたいと書けていた児童は、評価できると思う。

○成果と課題

◎よりしっかりと子どもの考えや心の動きを感じ取ろうとする教師のアンテナの感度を、高めることができた。

◎全体の場で表現しにくい児童や文章表記が苦手な児童について、正しい評価をすることの困難さを感じた。

実践校名（泉南市立西信達小学校）

◆実施学年（3年）

◆評価を位置づけた授業実践の分析

○評価の実際（評価した子どもの姿や、それをもとに行った支援）

◎うれしそうに笑っている明弘を見て、一郎はどんなことを考えたでしょう。

「なぜ将太は明弘に教えているんだろう。」「初めはできるわけないと思ってたけど、できるかもしれないと思うようになった。」

○将太は明弘にどんな気持ちで教えていたのか(補助発問)

「頑張れ!」「練習教えてあげるわ。」「一緒にがんばろう!」「できるようになってほしい。」

○明弘は何がうれしいのか(補助発問)

「将太君に教えてもらってうれしい。」「手伝ってくれていることがうれしい。」「支えてくれてることがうれしい。」

◎うれしそうに笑っている明弘を見て、一郎はどんなことを考えたでしょう。(再度)

「将太はやさしい」「自分も手伝えばよかった」

※授業での評価は、発言したことに対しての頷きが大半だった。

※狙いに即した回答が出されたが、いまいち深まりはない授業になってしまった。

授業後のふりかえりでは、29人中約20人の児童が思いやりに触れるような感想を書いていた。なぜ思いやりが大切かと感じたかを、自分なりに答えようとしているという観点、思いやりが大切だと感じる事ができたかという観点で評価することができると思う。しかし、指導と評価は一体のものであることから、適切に評価するためにはあらかじめ授業展開をしっかり練る必要があると痛感した。

○成果と課題

授業中の評価が難しいと感じた。発問に対する答えが教師の意としたものがでなくても、それは評価しなくてはならない。

結局、授業後、児童が書いた振り返りが、道徳の授業の評価を確実に取れる方法だと思われる。また、今回、振り返った感想の交流は行えなかったが、友だちの意見を聞くということはいろんな意味で大切なことだと思われるので、今後実施していきたい。

読み物の話の内容がいまひとつ理解できていない児童がいる。そのような児童に対しての支援が不十分だった。

◆参考資料

「さかあがり」 ふりかえり

1. 将太はやさしい。
2. 将太は明弘を教えてあげたけど、一郎は明弘に逆上がりのやり方を教えたならよかった。
3. みんなで練習して、一緒に逆上がりやればよかった。
4. 明弘は手伝ってくれてありがたそう。
5. 自分がやられてうれしいことや楽しいことは、友だちやいろんな人にもしようと思います。
6. この話は、途中で将太君は思いやりがあるなと思いました。
7. 逆上がりは絶対できるかと将太は思ったかと思います。
8. 将太君が助けてくれたから明弘君が逆上がりできてよかったと思います。
9. 逆上がり、私はできないけれど、がんばったらできるんだなと思った。

10. こんなことありました。せいしゅん時代思い出す。
11. わたしはさかあがりができるので、これからできない人に教えようと思いました。将太君はとてもやさしいと思いました。私も将太君みたいにしようと思いました。
12. 逆上がりができるようになったら教えてあげたい。
13. 思いやりは大事だと分かった。
14. さかあがりできてうれしいと言って、わたしもうれしかったです。
15. 一郎はなんではずかしかったかというと、たぶん将太は明弘の手伝っているのに、自分は手伝えなかったから恥ずかしかったと思う。
16. 明弘は友だちに逆上がりのやり方を教えてもらってうれしかったと思いました。逆上がりができるようになってほしいです。
17. 自分は一郎みたいになったことがあります。それは、長い時間練習してもでけへんからです。でもとちゅうで自分だったらと思ったら、かなしいです。だから思いやりは大事だと思いました。
18. 将太君はとてもやさしいと思いました。なぜなら明弘君に逆上がりを教えてあげてたところがいいと思ったからです。
19. 逆上がりができなくても練習したらできると思いました。
20. カッコいい逆上がりを見せたいのに、なんで逆上がりができない人にわる口言ったんだろう。

実践校名（貝塚市立木島小学校）

◆実施学年（3年）

◆評価を位置づけた授業実践の分析

○評価の実際（評価した子どもの姿や、それをもとに行った支援）

中心発問の場面の発言の様子や内容から

- ・ 中心発問や感想については、しっかりと子どもたちは自分の考えを書くことができていた。身近なお話だったので考えやすかったのではないかと感じた。
- ・ 「思いやり」についての価値を考えさせたいと思っていたが、「努力の大切さ」を感じた子どもが意外に多かった。今後、ねらいとした「進んで親切にしようとする道徳的実践意欲」ではなく、「目標に向かって粘り強くやり抜こうとする道徳的実践意欲」が育ったと感じたときにどのような評価をするのが課題として難しいなあと感じた。

○成果と課題

- ・ 授業者のねらいと異なった道徳的価値について発言等のあった子どもに対して、どのような評価をするのが難しいと感じた。
- ・ 感じたことを、ワークシートや授業の中でうまく表現できない子どもの評価が、今後の課題だと思う。

実践校名（和泉市立光明台南小学校）

◆実施学年（４年）

◆評価を位置づけた授業実践の分析

○評価の実際（評価した子どもの姿や、それをもとに行った支援）

◎中心発問から

子どもの身近に感じられる資料で、子どもたちは中心発問についてよく考えることができていたと思う。支援としては、中心発問に入るまでに登場人物が３人おり、ややこしくなるので、登場人物の挿絵を作ってストーリーを確認するということをした。

子どものワークシートからは、

- ・将太はやさしいなあ。ぼくは、なんてはずかしいことをしたんだろう。今度は明弘みたいな子がいたら、将太みたいに助けてあげよう。
- ・将太はえらいな。ぼくなんて、明弘のことをばかにしてだめだったな。さかあがりができるもやさしさがないとだめなんだな。
- ・将太はえらいな。やさしいな。将太みたいにやさしくすればよかった。後で、明弘にあやまろう。

などの意見があった。

◎振り返りから

- ・将太みたいなやさしい気持ちをもちたいと思った。てつぼうだけじゃなく、勉強で分からない子がいたら教えてあげたり、がんばれと言ってはげましたりしたい。
- ・将太はやさしいと思いました。これからはできない子にいろんなことを教えてあげたいと思いました。

○成果と課題

成果はねらいとしていた「優しさ」、「親切」、「助ける」などのキーワードが中心発問や振り返りからでてきたことである。グループでねらいにせまる授業分析ができていたと思う。

課題は資料の鉄棒の感想だけを振り返る子がいたことである。振り返りでは自分の日常に結びつけて考えることが大切なので、もう少し声かけをすれば良かった。そして毎時の道徳の時間での積み重ねが大切だと感じた。

実践校名（和泉市立北池田小学校）

◆実施学年（3年）

◆評価を位置づけた授業実践の分析

○評価の実際（評価した子どもの姿や、それをもとに行った支援）

ふり返りのワークシートの記述から

児童の感想の中に、「しょうたくんみたいに自分も教えてあげたいと思った。」という感想が多く見られた。日常生活の中でも、この道徳の学習をする前から、体育係が中心となって休み時間に、さかあがりができない友だちに教える姿が見られた。そのため「教えてもらってできるようになったので、次はわたしの教える番だなと思った。」という感想もあった。

単に、困っていたら教えてあげたいという気持ちだけではなく、「あきひろくんはすごくさかあがりができるようになりたいんだな。」という感想もあり、何かができない時の気持ちも考えることができたのだと思う。

○成果と課題

成果

ワークシートに全員が自分の考えを書くためには、一部の児童の発言によって展開していく形の授業では難しい。そのため、一時間で終わってしまうのではなく、中心発問について全員が考えるために、まず全員がワークシートに書く。そこまでに一時間かけてじっくりする。そして、次の授業で何人かの意見を発表してもらい、それらの意見に対して、児童らが意見を言うことで少し深まるのではないかと思う。そのようにしていく中で、じっくり児童らの意見をもとにして授業を行うという形に収まった。

課題

この授業で考えたことを後々も児童らの中で残っていくように、ワークシートをファイルしていくなどすれば、ふりかえることによって、生活の中で実際に生かしていけるのではないかと思った。

実践校名（和泉市立鶴山台南学校）